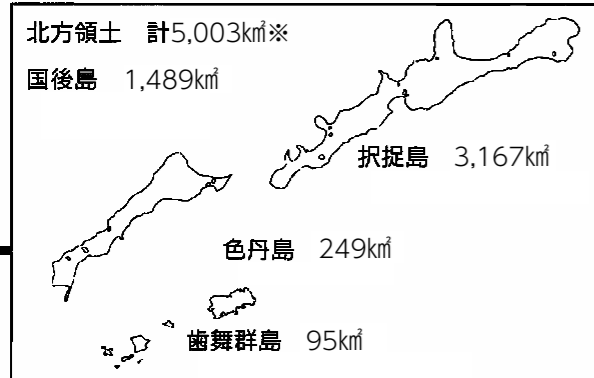


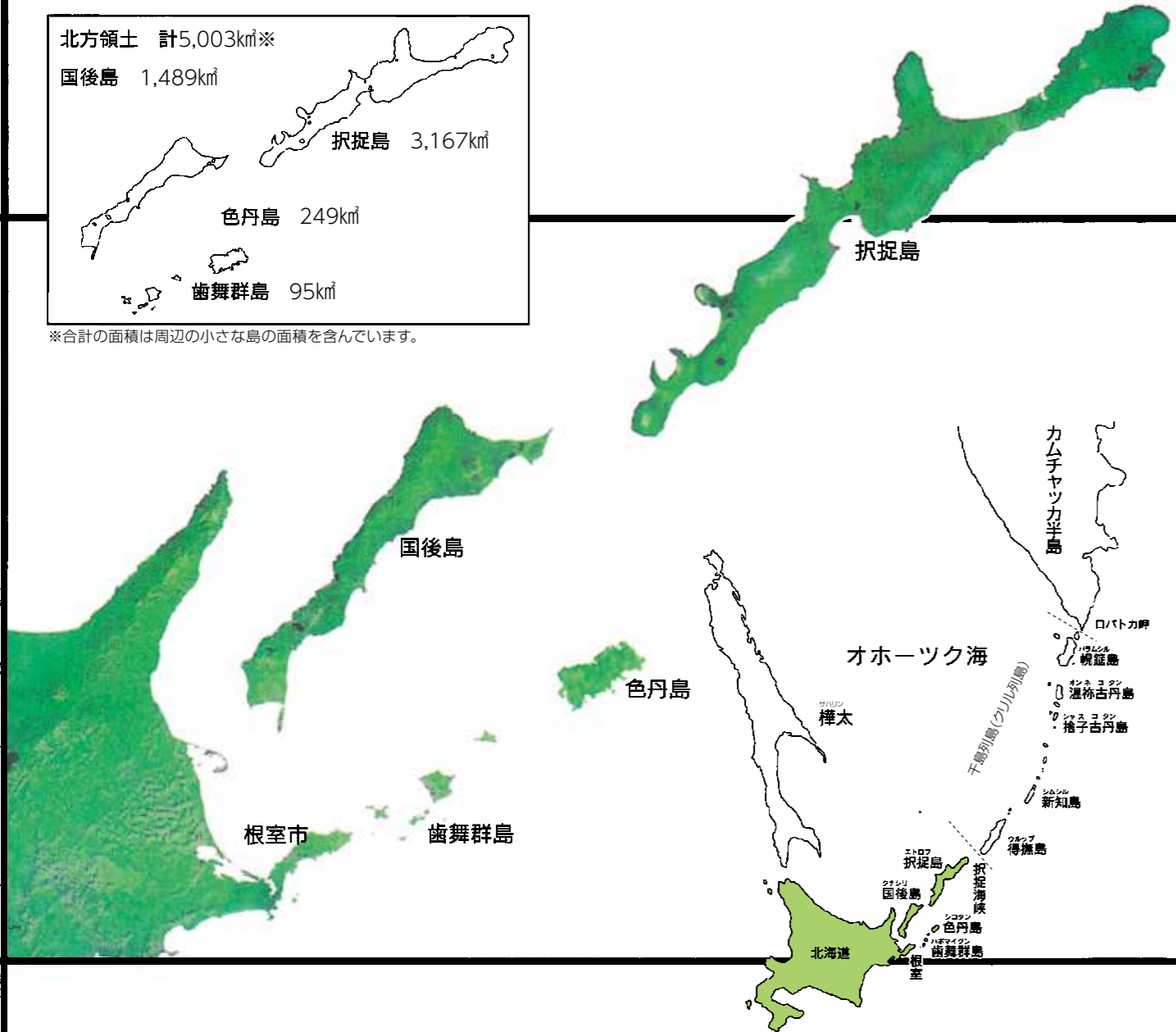
北方領土の早期返還を求めて

第27回「元島民の北方領土を語る会」集録

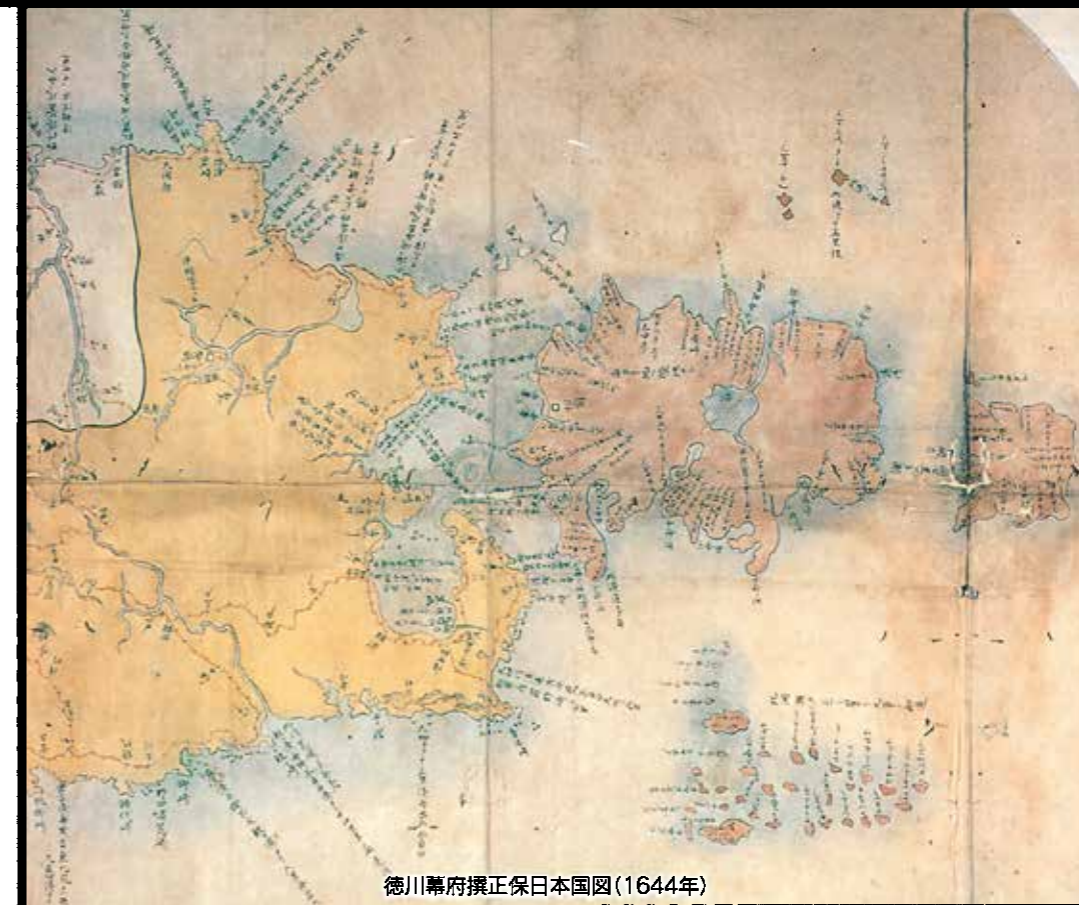
私たちが「北方領土」と呼ぶのは、
択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島（多摩島、志発島、
勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など）の四島です。



※合計の面積は周辺の小さな島の面積を含んでいます。



日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際的に正当な根拠があります。



徳川幕府撰正保日本国図(1644年)


四島（しま）の未来 心かよわせ 返還へ

(平成28年度 北方領土問題対策協会最優秀賞標語)

主 催 / 公益社団法人 北方領土復帰期成同盟

平成28年度
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて
第27回「元島民の北方領土を語る会」集録

発行／平成29年3月

編集／ 北方領土復帰期成同盟

〒060-0001

札幌市中央区北1条西3丁目3番地

札幌プラザビル3F

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

ホームページ：<http://www.hoppou-d.or.jp>

e-mail：hoppou-d@isis.ocn.ne.jp

印刷／株式会社 正文舎

も く じ

1	平成28年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱	2
2	平成28年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況	3
3	「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて	
	○ 北方領土返還要求運動について	北方領土復帰期成同盟 4
	【新潟県会場】	6
	○ 国後島元島民二世	館 下 雅 志
	○ 択捉島元島民	山 本 昭 平
	【長崎県会場】	14
	○ 志発島元島民	児 玉 泰 子
	【高知県会場】	21
	○ 国後島元島民二世	金 田 慎 吾
	○ 多楽島元島民	河 田 弘登志

1 平成28年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

北方四島は、終戦直後に不法に占拠されたまま戦後70年を超えてなお、ロシアに実効支配されたままであり、故郷に帰る日を待っていた元島民も既に半数以上の方が亡くなっている。

これまで日本政府は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、解決への道筋は見えていない。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。

この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

2 主 催

公益社団法人北方領土復帰期成同盟

3 後 援

公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

4 開催時期

平成28年9月～平成28年10月

5 開催内容

(1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟 (10分)

(2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世 (20分)

北方領土元島民 (40分)

2 平成28年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

開催月日／開催都市 開催団体	参加者 (人)	語り手 出身島	プロフィール
9月20日(火) 新潟県新潟市 新潟市連合婦人会	70	館下 雅志 国後島二世	職 業 自営業 昭和34年 中標津町生まれ 平成13年 千島歯舞諸島居住者連盟中標津支部理事・青年部長 平成24年 (公社)千島歯舞諸島居住者連盟後継者活動委員会委員長
		山本 昭平 択捉島	昭和3年4月 択捉島薬取村生まれ 昭和22年 強制送還 平成9年 千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長 平成21年 “ “ 退任
9月25日(日) 長崎県西海市 西海市地域婦人会	170	児玉 泰子 志発島	職 業 昭和19年10月 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長 昭和22年秋 志発島生まれ 昭和52年 強制送還 平成8年 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長に就任 平成21年 総務長官表彰「北方領土返還要求運動功労賞」受賞 現(公社)千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長
9月26日(月) 高知県高知市 高知県連合婦人会	80	金田 慎吾 国後島二世	職 業 税理士 昭和36年 札幌市生まれ 昭和59年 金田税理士事務所入所 平成11年 金田慎吾税理事務所開設
		河田弘登志 多楽島	職 業 団体役員 昭和9年9月 多楽島生まれ 昭和20年11月 多楽島から引揚げ 昭和33年～平成7年 根室市役所勤務 平成9年 千島歯舞諸島居住者連盟理事 平成25年 (公社)千島歯舞諸島居住者連盟副理事長

3 「元島民の北方領土を語る会」

元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟

本日お集まりの皆様方には、日頃から北方領土返還要求運動にご理解、ご協力いただき、深く感謝申し上げます。

北方四島は、父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない我が国固有の領土です。

その、北方四島が旧ソ連、現在のロシアの不法占拠の下におかれてから、今年で71年を迎えました。

北方領土問題は、第二次世界大戦の最中、日本の降伏直前にソ連が日ソ中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に、北方四島を不法に占領したことが始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領については容認したものの、北海道の北半分の占領は認めませんでした。

そのためソ連軍は、アメリカ軍の不在が確認された北方四島に兵力を集中し、昭和20年8月28日～9月5日までの間に北方四島の全ての島を占領しました。

この不法占領に対し、昭和20年12月1日、当時の根室町長^{あんどういしすけ}安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことが出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、北方領土返還要求運動の始まりです。

もし北方四島がアメリカの占領下に入っていたら、沖縄と同じように返還されていたかもしれません。

根室から始まった返還要求運動は、札幌、函館と裾野を拡げ、北海道全域に拡大して行きました。その後、昭和30年代に入ってから、全国的な運動として根付いたのです。

領土問題は国家の主権に関わる基本的な問題です。政府は「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、外交交渉を続けてきております。

特に今年に入ってから、頻繁に日露首脳会談を重ねてきており、9月の日露首脳会談において、プーチン大統領が12月に来日することが決まりました。大統領としては11年振りの来日であります。さらに今年、日ソ共同宣言から60年という節目の年であることから、北方領土問題の解決という光が見えるのを元島民をはじめ日本国民全員が固唾をのんで期待しているところでもあります。

元島民の平均年齢も80歳を超えました。元島民の方が、一人でも多くご存命のうちに、北方領土が返還され、自由に故郷へ帰れる事を願って止みません。

そのためにも、外交交渉の下支えとなる国民世論の結集、皆さんたちの北方領土返還要求に対する大きな声が必要なのです。

北方同盟では、関係機関、団体との連携のもと、積極的に返還要求運動に取り組み、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしておりますが、北方領土が不法占拠されて70年以上の長い時間が経ち、返還要求運動の先頭に立ってきた運動関係者も高齢化が進みました。

そのため、これからの返還要求運動を引き継いでくれる若い世代の方々の参加が必要不可欠です。

北方同盟としては返還要求運動を粘り強く展開し、次代の世代に対する返還要求運動への参加を推進するとともに、北方領土問題を風化させぬよう努力いたします。

最後に、皆さんにお願いがあります。北方領土問題は日本国民皆さんの問題です。択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところであり、住むべき所なのです。そのことを忘れないで下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなり、1日も早い故郷への帰郷を願っている元島民の方々の励みとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

皆さんこんにちは。ただいまご紹介頂きました北海道根室管内中標津町から来ました館下雅志です。私は元島民二世で、母が国後島の古釜布という所で生まれました。現在千島歯舞諸島居住者連盟中標津支部の青年部長をしています。ただいま57歳なんですけど、なかなか四島が帰ってこないんで、30年青年部長をしていまして、若い部長ではありませんが、短い時間宜しくお願ひします。今日は何の話をしようかと考えてましたが、母の話を中心に色々と話して行きたいと思ひます。

私の母は昭和9年8月5日生まれで、北海道国後郡泊村古釜布というまちで生まれました。14歳まで、両親と兄の4人家族で暮らしてました。祖父は林業をやって高山植物などを採取して販売してました。祖母は古釜布で1軒しかない豆腐屋を営みながら生計を立てながら島で暮らしてました。母は“豆腐屋の京ちゃん”と呼ばれて、町の人に可愛がられながら暮らしてました。

幼児期は浜辺や川などで遊び、家の向かいにある芝居小屋に芝居を見たりして、近所の人と遊んだと言っていました。

実は北海道国後郡泊村とありますが、本籍を北方領土に移す事が出来ます。戸籍謄本が必要な時は、国後島、択捉島、色丹島は根室の法務局、歯舞群島は根室市で取る事が出来ます。国後島では泊村と留夜別村、択捉島では留別村、紗那村、薬取村。色丹島は色丹村。歯舞群島は歯舞村。この7つの村に移す事が出来まして、現在登録している方は190名位います。

島の様子ですが、暖流の黒潮と寒流の親潮が接しており、霧が掛かりやすい町です。最近は気温が変わってきて霧も少なくなって来ましたが、私の住んでいる所と国後島は同じ気温です。そして世界三大漁場で、黒潮と親潮がぶつかるので漁業が大変盛んで、昆布をはじめクジラやカニが豊富に取れる大変豊かな島々でした。しかし、その生活も第二次世界大戦の終戦で変わる事となりました。それはソ連軍の北方四島への侵入です。

昭和20年8月15日終戦。その1週間前、ソ連は日ソ中立条約を無視して連合軍に参戦し、その後北方領土に侵入してきました。占守島の戦いで、18日にソ連軍が占守島の竹田浜に約8800人の兵隊を送り込んできました。そして日本の第91師団2000名が戦いました。しかし、ソ連兵の人数に敵わなく23日に停戦協定を締結しました。

そして昭和28年8月28日、択捉島に上陸したソ連軍は9月1日に国後島に来ました。その数日後には母が暮らす古釜布にもソ連兵がくると聞いた村人や祖父・祖母は、若い女性や女の子が被害を受けないように、髪の毛を切り男の子の服を着せたそうです。私の母も髪を切られ、男の子の服を着せられてたと話してました。

ついに母の家にもソ連兵が来ました。やはり体が大きく髭を生やしとても恐ろしかったそうです。ソ連兵は鉄砲をぶら下げて、大きな声で同じ言葉を何度も叫んで家に入ってきました。「ヴァダー・ダァ・ワイ、ヴァダー・ダァ・ワイ」ロシア語なので何を言っているか判らないんですが、一人のソ連兵が炊事場に行って水を飲むと連呼するのを止めたそうです。ソ連兵は水を飲みたかったんだなあと後で気づいたそうです。島の気候は道東と同じくらいなのですが、その日は暑い日だったのではないかと思います。

それから数日後、ソ連兵が母の家にやってきて家を占拠し、母の家族は小さな部屋に押し込ま

れ、強制送還するまでの2年間一緒に暮らしました。

母の家に来たソ連兵は、日本でいうと警察官のような仕事をしていて、チョコレートをくれたりロシア語を教えてくれたので母の印象としては、そんなに怖いという印象はなかったそうです。

しかし、祖父や祖母はソ連に家を奪われ、島を奪われ捕虜同然に2年間生活しました。一度も気を許す事が出来ず島を占拠された元島民は、監視されながら生活をしていたので、歯舞群島や国後島にいた元島民は命がけて船で島から逃げました。その脱出の際、脱出が見つかって銃撃され、亡くなった元島民も居ます。故郷を奪われ、島を後に逃げ出した元島民の気持ちを考えると胸が痛いです。私の住んでいる野付半島の羅臼から標津にかけて元島民は多く居ますが、その辺りに住んでいる元島民の方は、脱出した方が多いです。

そして私の母、家族にも強制送還の日が訪れました。残された元島民、四島合わせると9000人余の方は風呂敷包み一つでソ連の貨物船に大きな網のモッコで、モッコから落ちた人もいましたが、元島民は死ぬ思いで船に乗りました。船は樺太に行き、収容所で数週間過ごした後、函館に戻されました。元島民が島を追い出された日より、北方四島は完全にソ連に占領されました。

函館に着いてから、汽車に乗り母は根室の親戚を訪ねましたが、根室も空襲で7割ほど焼けてしまい、親戚も空襲にあっており引き揚げ後の生活はとても厳しく辛い生活が長く続いたそうです。

私が母から「私は元島民だ」と初めて聞いたのは、平成4年のビザなし交流が始まった年です。「私も故郷・古釜布に行きたい」と。ところが心臓病でペースメーカーを入れているので参加できませんでした。故郷の写真、ビデオを撮ってきて欲しいと息子の私に託したのです。私も平成5年のビザなし交流に参加し、国後島訪問から帰って写真を見せると、以前暮らして居た町並みは変わっており、子供の頃の様子と変わっておりガッカリしていました。その後、母は国後島に一度も行けず「一度は国後島に行きたいな」と呟きながら、平成24年8月に亡くなりました。

私が返還要求運動に参加したキッカケは、母の思いを何とか叶えてあげようと思った平成5年のビザなし交流の参加からでした。そのビザなし交流に参加したとき、日本の外務省の方が、ロシアの関係者に「この交流が続く事で、日本とロシアが必ず良くなる」帰りの船の上で語っているのを見てとても感動しました。それから現在まで語り部や色々な返還要求運動をしています。

元島民の方は署名活動を中心にしてますが、北方領土の面積や色々な事をビンゴゲーム形式にした北方領土ビンゴやタブレットの北方領土クイズや今年の春には北方領土ネット検定をしました。しかし、北方領土の返還に向けて、更に私達も返還要求運動を進めて行かなければならないと思っています。

元島民は71年間「四島を還せ」と叫んで来ました。しかし元島民1万人以上は四島の返還の見通しも立たない中、四島の返還を念じつつこの世を去っています。私の母も一度も故郷に行けず、78歳で亡くなりました。

今年12月15日にプーチン大統領が来日し、安倍総理の故郷である山口県で首脳会談を行うと聞いています。新しいアプローチ、8つの経済協力だけでなく、是非北方領土問題の解決に向けて進む事を願っています。

北方四島の返還は千島連盟の願いですが、日本国民の願いでもあります。元島民の先輩達が今まで行ってきた署名運動はもちろん、後継者が持っている行動力と知恵を結集して、一日も早く北方領土が還るよう頑張ってください。

本日お集まりの新潟市婦人連盟の皆様方にも、更に返還要求運動を推し進めて頂きたいと思えます。

日ソ中立条約を破棄し、奪われた北方領土。アメリカ軍が北方領土に居ない事を知って侵入してきたロシア。元島民を北方四島から強制送還させたロシア。元島民の暮らしていた故郷は、今は無いのです。ロシアの北方領土不法占拠は絶対許されません。この悔しさを忘れずに、これからも元島民後継者として返還要求運動を続けて参りますので、今後とも新潟市連合婦人会の皆様方には北方領土返還要求運動にご理解、ご協力をお願いいたします。ありがとうございました。

山本昭平と申します。ただいま館下さんから、元島民の年齢が平均80歳というお話がありましたが、私は88歳なので8歳もオーバーしております。

今日こちらにお伺いしたのも何かのご縁かと思いますが、私の祖母が新潟市の出身なんです。七尾トメと申します。菓子屋をやっていたそうですが、竈を返しまして一家離散しました。それで北海道の叔父に預けられて、島に渡ったという経歴があります。母は暖簾をずっと島で持っておりまして、「七尾」と書いてあるちょうど一反風呂敷ぐらいの大きさの暖簾です。それに引き揚げの時布団を包んで持ってきたんですけど、実は母が不注意で、自分の娘が学校を卒業して神戸に行く時に荷物として持たせてやったと。ところが言い含めたか言い含めなかったのか、妹はそのことを知らないで「だんだん古くなってきて、ポロになったから捨てた」という話で、最近になって「何バカなことをやっているんだ。あれは、おばあさんの記念なんだ。おばあさんは、七尾家を再興して欲しいと、その願いをおまえに託したんだ。お前はそれを知らなかったのか？」と。すると「母さんが何も言わなかった…」と。その様なことで今日新潟にお伺いしたのも、何か祖母の引き合わせじゃないかと考えて参りました。

私は択捉島の出身ですが、択捉島と言うのは地図では北緯45度ぐらいの所なんです。そして私の生まれた所は択捉島でも北の方です。択捉島は長さ200kmくらいあります。面積は3,167km²あります。島の周囲は1000kmあります。ですから、沿岸を船で走りますと島というより大陸の感じがします。先程館下さんがお話していた国後島は、択捉島の半分ですからその大きさが判るかと思っています。

私の村は薬取郡と郡部になっていますが、択捉島の約1/3位のスペースがあります。皆さんお持ちのプログラムの端の方にラッキベツ岬がありますね。このラッキベツ岬には非常に大きな滝があります。これは60丈と言われてますから、メーターにしますと181mくらいあります。それが1本の帯のように落ちています。崖から直接海面に落ちている非常に大きな滝です。択捉島の隣がウルップ島ですが、昔はコンパスが無かったのでウルップ島からこの滝を目掛けて択捉島に入ってきたと言われてます。

この近くにカムイ岳と言うのがあります。このカムイ岳の裾のカムイワッカオイと呼ばれる所に近藤重蔵が「大日本恵登呂府」の標柱を建てたと言われております。私達が見た時にはもうありませんでした。昭和3年に石碑で標柱が建立されたそうですが、私は実際に見たことはないです。

戦後になって、ソ連の漁業コンビナートというものが開設しました。それで「16歳以上の男女は全部働け」「働かない者には食料を配給しない」ということで、私も強制労働で例えば冬は薪切り。向こうには燃料がありませんので、ガンビ、ガンビというのは燃料用の白樺とかを伐採して彼らに供給する。5月になりますと海が開けます。流水が全部去りますので、そうなるとうすぐに鱈釣りを始めます。その時に、私の村から20~30kmのラッキベツの方に出掛けて行って、鱈を釣るわけです。その時にカムイワッカオイの岬を回ると標柱はなかったですね。終戦と同時に石碑のような記念碑のような物は全部倒したんです。ですから今は無いと思います。

最近日本国土地理院の地図で、択捉島のカムイワッカオイの地形が変わっていると知人から地図を貰って見てみるとカムイワッカオイはむちゃくちゃになって崩れています。択捉全体が崩れて

いまして、多分東方沖地震の時に島がかなり揺すられて、あちこち崩壊したのではないかと私の私見ですが思います。

択捉島だからと言って、そんなに寒いわけではないです。雪は確かに多いですが、薬取の場合は吹きだまりが非常に出来ます。例えば、12月20日くらいから1週間程度ぶっ続けで吹雪になります。そうすると屋根の上まで雪が積もります。その間外に出られない。子供なんかはスキーをするのですが、なかなか出れない。やっと吹雪が収まって出る時は玄関からは出ない。窓を開けて窓から出る。そして玄関の雪かきをして、道を作る。ですから玄関の道は軒下くらいまでの高さの通路が出来る。千島と言うと皆さん寒くて大変だろうと思われそうですがそんな寒くもないです。私の家は商売をされていて、非常に風が強いので石屋根なんですね。ですから柵の上に石を置いてました。

私もこちらに来て勤めた会社の工場が青海にありました。東京から夜行で来て、朝、直江津で乗り換えて青海に行くのですが、その途中に昔は色々な家がありました。その中に柵葺きに石を載せた家がずいぶんありました。それを見て涙が出ました。懐かしかったですね。もしやあの家は、祖母が新潟なので新潟の暮らしがヒントになって石を乗つけたのかなと。そんな思いに駆られています。

8月15日に終戦になり、終戦の話はラジオで聞きまして、その他に役場のニュースでも聞きましたが、その後どうなるのかと言うのは全く判らない。本国からのメッセージが無い。

例えば、戦争になってここは何処の国が占領するとか、だから島民は頑張れとか。そういうのがあると思うんですね。海上交通はちゃんとやるとか。そういう一番大事なニュースが入って来ない。ですから私なんかは、島は捨てられたと。あれだけ戦時中に頑張れ頑張れと言っときながら戦争に負けて終わったらこういう状況かと。戦争が終わったらこういうものかと。ドイツと同じですね。ドイツは政府が崩壊しましたから。そういう例を見てたので、戦争に負けるとこういうことになるのか、非常に悔しい思いをしました。日本政府に対する悔しさっていうのがありました。

島民は、じゃあどうなるんだ。何処の国の軍隊が占領しに来るんだということが最大の悩みでした。あの時の択捉島の状態というのは、沖縄がすでに5月に玉砕して、米空軍が来ている。その数年前にはアッツ島が玉砕された。それからアメリカの戦法というのは、島伝いに日本を攻撃してくる。沖縄、その次は何処に行くかとなると択捉島しかない。択捉島を抑えれば、北千島は黙っていても力が弱ってくる。だから多分択捉島に来るだろうという。そして7月15日に根室大空襲がありました。その時、私と父と妹、薬取村の助役と村医の佐藤さんが薬取に帰るために根室から船に乗っていました。本当は夜中に船が出る予定だったのですが、海運局の許可が下りなかったので根室の沖にある弁天島の沖に停泊してたんです。ところが15日の朝6時頃大空襲がありまして、一番の標的にされたのが私達の乗っていた船と、もう一隻11時の方向にいた貨物船でした。私達の乗っていたのは500トン位の蒸気船なんですけれども、その後部のデッキに2等船室がありまして、13名乗っていたのですがそこにロケット弾の直撃を受けまして、部屋が吹っ飛んでしまいました。そして辛うじて生き残ったのが私と妹なんですね。あとは、父も何処に行ったのか判りません。未だに行方不明のままなんです。ロケット弾3発でその船は沈みました。そして私は何とか陸に上がって、金比羅山に逃げて、これは誰かに助けて貰わなきゃならんと、根室支庁に勤めていた高橋さんのお家に駆け込んで、島に帰るまでお世話になりました。そういう緊迫した時代だった。

終戦になった時に、あの当時の制空権は完全にアメリカに握られていた。制海権もアメリカの

潜水艦がウヨウヨしていたんです。ですから我々が島を渡るのでも命がけだった。当面の敵はアメリカだったので、当然アメリカが来るだろうと予測していたところが、終戦の後にソ連が参戦してきた。そして、占守島に攻撃を掛けてきた。そして最終的には北方四島まで乗り込んできた。

ですが本当は、最初はウルップ島まで来て我々の占領は終わりだと。ソ連の司令官が武装解除しながらウルップ島まで来た。そして我々の占領はこれで終わりだと。その時日本の司令官も立ち会っているんです。そして、日本の司令官に「見てくれ、これがモスクワからの指令書だ」と。見ると18島を攻めなさい。その先はアメリカだと。そして我々は帰ると引き揚げたらしいんです。ところがアメリカが入っていないと知ると、一挙に北方四島を占領した。そして8月27日に択捉島の留別にソ連の軍隊が入ってきた。ここから択捉島の占領が始まったわけですが、留別には郵便局があって島内の電話の中継地点というかポイントになっていた。それをソ連に抑えられたので、島内に通信が出来なくなった。だから留別にソ連軍が入って大変な事になったが、そのあと一切情報が入って来ない。待てど暮らせど情報が来ない。ですから、大変な事になっていた。

我々にしたら、一般的な感じで戦争に負けたら何をされてもやむを得ない。当時はそんな感じでした。ですからソ連人はどんな軍隊か判らない。それでなくてもスターリンは非常にワンマンで冷酷な奴だと聞いていたので、その軍隊だから多分酷い事になるだろうと。ですから女・子供は何をされるか判らないので、若い娘さんは顔に炭を塗ったり男装したりと言う事を始めた。しかし私達の住む薬取村にソ連軍が来るという情報が無いんです。8月27日に留別に上陸して、我々の薬取村に入ってきたのは10月の始め頃なんですね。ただその1週間くらい前に、ソ連軍の女性の兵隊と副官2人が馬に乗ってきて、胸に日本語で「この馬に飼料と水をあげてください」と書いてあるプラカードをぶら下げて役場に現れたんです。これが10月何日にロシアの軍隊が村に入りますという通知らしかったです。

ですから回覧板が回りまして、それまでに役場に銃や鉄砲、ラジオとかを一切を出して下さい。それを武装解除としてソ連側に引き渡します。どうも様子がおかしい。一番最初に入ってきた兵隊は子供のような兵隊。ちょうど我々のような兵隊。我々が見て、これなら彼らと話が出来るとは無いのかそういう雰囲気では入ってきましたが、秩序は非常に保たれてまして、略奪とかはありません。ただ家宅搜索を始めます。

3人一組で押入の中や隅々まで引っかき回して搜索します。ベトナム戦争やイラク戦争でも同じように一般の家に立ち入りますね。日本人は外国と違いますが、みんな疑う。何を隠しているか判らない。誰がゲリラを始めるか判らないという意識が強い。それも一段落して、1945年12月から翌年の1月位に民間人が入ってきたんですね。それでこれは可笑しいと。普通の占領であれば軍隊が入って来て、時期が来ると軍隊が撤退してまた日本の政治になります。ところが民間人が入って来て漁業コンビナート、魚の加工工場を作ると言い、そのうちに日本人に身分証明書を発行すると言いだした。その身分証明書も大がかりな物で、ソ連のルーブル紙幣と同じ紙で作るんです。ルーブル紙幣の紙は非常に強い紙で、なかなか破れない。その紙に上半身の写真を入れて、絶対偽造されないようにソ連の刻印を押したA5版の紙を持たされた。それを絶えず持っていなければ、スパイだと疑われて何処かに連れて行かれる。そんな暗黒政治でした。私が引き揚げたから聞いたところ、1946年の2月くらいに北方領土を自分の国に組み入れていた。

その時期に民間人が入ってきましたが、一番溶け込みやすいのが女性です。日本人には塩はあるが甘味料の砂糖とかは無い。バターも無い。彼らは砂糖とかある。そうすると、ロシアの女性が小さなグラスに砂糖を入れて持ってきて、ハンカチが欲しいのだけれど砂糖と交換してくれないかと来る。一番始めに交流を始めるのは女性なんです。言葉は判らないけれど、国際交流とい

うのは一番始めに女性から始める。あの当時1円が4ルーブルだと言われてましたが、1円は1ルーブル。物もあるか無いかで価値が変わる。物々交換が非常に盛んに行われてました。

女性は強いです。ソビエト時代から女性は強いです。私は軍国主義時代に生まれ育ったので、男女平等という思想が最初はよく判らなかつたんです。ところがロシア人たちを見て、みんな同じなんだと。本当に不思議だった。女性の将校もいるし、労働者でも女性が格上だと命令です。あーしなさい、こーしなさいと。驚きました。

一度、漁業コンビナートに日本人のリストを作るから手伝いに来いと言われて行った事があります。そうしたら、大型のそろばんが至る所にあって、ソ連にもそろばんがあるんだと驚いて。日本のそろばんより幼稚ですが。女性が占領時の緊張した空気を非常に和やかにしてくれたと思います。

私の家は商売をしてましたので、コンビナートの販売部にするから店を貸してくれと言われて店を貸しました。ところが失火で焼かれてしまった。そうしたら、お前が犯人だ。お前は日頃ロシア人に良からぬ感情を持っているから、お前が犯人だと。それで裁判を受けることになり、12月の冬に薬取から100キロほど離れた天寧にスキーで歩いて連れて行かれました。そこで裁判を受けたんです。それで裁判を受けてる最中に、たまたま私が食器を返しに行ったら何時も居る兵隊がなくて、もの凄く綺麗なマダムが出てきた。私もビックリしたし向こうもビックリした。私がロシア語で挨拶したら、何処でロシア語を習ったの？と聞いてきたんです。家には国境警備隊の医者が出て教えてくれたと話したら、その人を知っていると。なぜこんな所にいるの？お前が来る所じゃないよと言うので色々事情を話した。そしたら、お前はお父さんがいるの？と。父は終戦の1ヶ月前に根室で死んだと話したら、それは気の毒だと非常に同情してくれて、兄弟はいるか？お母さんは？と色々聞いてくる。そうして話していたら、判った。お前がすぐ帰れるように主人に話してあげると。そして、行くときにお前のお母さんと兄弟達に必ずクリスマスプレゼントをあげるから、きつと寄るのよ、きつとよと。そして裁判の最終日、一人ずつ呼ばれるのですが、何時もいる通訳の人が居ない。判決文を読まれて、これに署名しろと。これに署名したら自分はそのままシベリアかモスクワに連れて行かれる。そう思って覚悟したんですが、脂汗がどっと流れた。しかしいずれにしても署名しなければならぬ。それで思い切って署名したら、「これで全部終わりだ、お前達はもう帰って良い。4時間時間をあげるから、何処を見ても良い」と時間をくれた。

後で考えたら、マダムが必ずクリスマスプレゼントをあげる自分の所に来なさいと言っていたので、裁判官の旦那さんに言ったんだと思うんです。ただその時、嫌疑者が3人いた。で、この天寧という所は飛行場があって軍事基地なんです。日本人は1人もいない。だから、こんな所で4時間もウロウロしてたら、他の軍隊に何故こんな所でウロウロしてると言われたら困るので、一刻も早く立ち去った方が良いということで、事情を話しあって逃げるように坂を下りて天寧から帰った記憶があります。私を感じたのは、母親というのは日本もロシアも同じだなと感じました。

我々は魚採りとか色々な労働を彼らに教えました、わずかばかりのルーブルを貰ったもののタダみたいなもので、強制送還の時に樺太の収容所で荷物の検査をされ、その時に持っているルーブルは全部取られて、本当に裸同然で函館に来ました。

そして、函館でも荷物検査をするんです。もう腹が立ってしょうがなかったです。俺たちは日本人なんだぞ。何故ここに来て、みんなやっとの思いで函館に辿り着いたのに、何だ！と強く思いました。ここにもアメリカのMPがいるんです。で、荷物を全部開梱させて検査をしました。

そして検査したのち掌を出せと。で、出すとハンコを押すんです。私達は肉並みでした。

島を去るとき、薬取村には70～80戸ほどの戸数だったんですが、最初の送還命令はその半分程度だったんです。その半分がトッカリモイまで荷物を担いで歩いてきて、ですがすぐには船に乗せて貰えない。2日も3日も待たせられてやっと船に乗れた。船といっても小さな発動機船なんです。で、発動機船が動き出すと、岸でウロウロしていた6～7頭の犬がいたんですが、そのうちの1頭が海に飛び込んで、そしたら次々に犬が海に飛び込んで飼い主を追ってくるんです。みんなで犬に帰りなさい、帰りなさいといって悲しみをこらえてました。ところが、帰りなさいといくら言っても犬は追いかけてくる。そしたら船の機関士がたまたまなくなって船のスピードを上げるんですが、犬は必死になって追いかけてくるんです。その帰りなさい、帰りなさいの音が今までこらえていた島を去る悲しみと一緒にあって、それが今でも私の心から離れません。

北方領土の返還については、大学の先生や政治家が2島返還だとか折半だとか、勝手な事を言っています。これは、私は日本人たるもの言うべきでは無いと思っている。これは、今まであった国境をこっちからこっちに移すっていうのと訳が違う。元々日本の領土を取られるかどうかの問題なんです。

1855年の日露通好条約で国境を決めたにもかかわらず、不法占拠している。だから日本の領土に間違いはない。それを2島だ3島だと一体なんなんだと。我々島民からしても、国からしても領土というものは絶対手放したらダメなものだと。当然取られるべき理由は無いのです。

12月にプーチン大統領が来ると言っている。どんな話になるか判らないが、こと領土問題に関しては、やはり四島はキチンと還して貰わなければならない。そのためには、日本の皆さんの総意が必要です。日本人全員が2島か、3島かと言わないで四島全部返しなさいと。ここは日本の領土だちゃんと還して貰わなければならない。

12月15日安倍首相は、プーチン大統領を故郷山口に招待すると報じられています。どのような話し合いになるか、固唾を飲んで見守っています。

我々島民は四島返還を悲願として政府に強く要望してきました。ところが一部の政府関係者や大学の先生などの中に、「二島だ、三島だ、面積折半だ」他国の例を引き合いにするなど、様々な論評を唱える方々がおられます。ロシアならずともこのような論評をみると、どの様に思うのでしょうか。

また過去に100人もロシアの経済団体を招いた閣僚もいました。私には領土を真剣に考えているとは到底思えません。

四島は間違いなく日本の国土なのです。1855年日露通好条約によって国境を確定した約定があるのです。それをロシアは日本の敗戦に乗じて不法に占拠しているのです。それを正当化しようと躍起になっているのです。国境が右に行ったり左に行ったりするのは全く意味が違います。

何も間違っていない日本が相手の言うままに国土を失うということは決してあってはならないのです。ロシアに対して四島返還は「日本国民の総意である」ことをはっきり見せ付けなければなりません。

私は88歳で何時どうなるか判りませんが、ここに力強い2世がいますので一緒に頑張っていこうと思います。

皆さんこんにちは。今司会者の方から北海道から来られたとご紹介されましたが、実は強制送還させられて根室市に住んでおりましたけれど、北方領土返還を目指すには東京に出た方が良いでしょう。色々と運動しやすいなと思ひまして、東京に出てきまして今は東京に住んでおります。本日はお招き頂きまして、ありがとうございます。

実は、元島民はドンドン高齢化が進んでおひまして、今の平均年齢は80歳を超えております。そして17,291名いた元島民も2/3くらい亡くなりました。私の家族ももうほとんど亡くなっております。

私が生まれたのは1944年です。じゃあ1年しか想ひがないじゃないかと思うでしょうが、実は3歳まで住んでいました。3歳ですからほとんど記憶はありません。記憶はありませんが、家族からしっかり島の想ひを聞かされ、また元島民の方々ともたくさん付き合ってきたので、私の中には島そのものが、生活が受け継がれております。

今日は最初に北方領土の概要と戦前の様子をお話して、2番目に占領と強制送還、3番目に望郷の念をお話し致します。それで時々質問をさせていただきます。なるべく会場と一体になった方が良いでしょうので、質問させて頂いて一緒に北方領土について勉強していきたいと思ひます。

北方領土と言うと寒くて何にも無いと思ひ人が多いと思ひます。一番生産量が多かったのが昆布です。それから鮭、鱒、鱈、ホタテ、それから缶詰、カニの缶詰その他小型の魚などを採取・加工してました。

北方領土と言うのは、歯舞、色丹、国後、択捉と言ひますが、では皆さん質問します。歯舞という島があると思ひ方は手を上げて下さい。実はですね、歯舞という名前の島は無いのです。なぜ歯舞と言われているかという、リーフレットに地図がありますが、根室から16キロ離れた所に歯舞村の本村があったんです。その村の行政府に、離島の島々が入ってて、全部含めて歯舞と現在は言われております。小笠原諸島の父島、母島などと同じように、歯舞という島は無いのですが、1つずつ言うとな面倒なので歯舞、群島と。正確には歯舞群島と言ひます。従って歯舞村と言うのは2つに分かれているんですね、今は。本村は北海道、離島が占領されている。戦後暫くして根室と歯舞村が合併しましたが、今は行政的に言うとな根室市が分断されている状況にあります。戦後行政の支配は出来ていません。

歯舞群島の主な生産は昆布です。色丹島はクジラ、干鱈とか海草類です。国後島はカニ缶や昆布、その他の海草類。択捉島は鮭の塩蔵と海草類でした。北方領土と言うとなみんな同じ物が採れると思ひますが、4つのそれぞれの島で色々な物が採れて、それぞれに違う様子を見せています。

それではここで質問させていただきます。皆さん日常でよく沖縄を良くテレビで見ると思ひますが、国後島と沖縄どちらが大きいでしょうか。沖縄が大きいと思ひ方、手を上げて下さい。実は誤解されているんです。沖縄より国後島の方が少し大きいのです。そして択捉島は国後島の倍あります。日本列島としては、本州、北海道、九州、四国、択捉島、国後島、沖縄となります。ただ残念なのは、日本地図って全部入れたのをなかなか見る事が出来ないから比較対照出来ないんだと思ひますが、とても大きいんだということ判って頂けると思ひます。

それでは1つ1つの島について少しお話させていただきます。根室で全地婦連さんが研修とかされ

てますが、行かれた事のある方いますか？実は私は根室ですとずっと育って、海の向こうに国後島の山が見えたんですが、山というものを体験したことなく育ったんです。それは根室の町もそうなんですが、歯舞群島は真っ平らなんです。洋上から見ると、お盆やおせんべいを置いたようなものです。おかげで草がたくさん伸びるので、軍馬の生産をしていました。それから離島が沢山あって岩礁がたくさんあるんですが、ここで質問します。海の中に岩礁があると何が伸びると思います？そうなんです。昆布が育ちます。じゃあ昆布が育つとどんな生き物がいると思います？魚なんです、甲殻類です。皆さん結構好きです。カニとかウニ、鮑、高級な物が育つんです。そうすると甲殻類の好きな海の動物がいるんですが、何だと思いませんか？そうです、ラッコがいるんです。凄く残念なんです、北方領土と言うと何となく政治の問題にしちゃって、こういう話を聞く機会がないんですね。昆布が育ってて、私も見たことあるんですが、昆布に巻かれて寝てるんです。このラッコというのはもの凄く甲殻類を食べるんですね。とても自然が豊かですし、貴重な栄養源があります。そして、野原なので軍馬の生産に適してました。そして昆布がたくさん採れたので、1日中昆布を採ってました。

色丹に参りますが、色丹は戦前東洋の箱庭と言われたくらい綺麗なんです。そして、この島独特の高山植物がたくさんあります。戦前は高山植物の学者にとって色丹というのは憧れでした。特に太平洋側は絶滅危惧種のエトピリカがたくさん住んでいます。

国後にまいます。国後はカニの宝庫です。タラバガニがたくさん獲れました。カニって足が早く腐食するのが早いです。で、たくさん獲れるので塩漬けにするしかなかったんです。でも塩漬けにしたら美味しくない。それで戦前どうしたら良いかと缶詰の生産を手掛けたんです。皆さんカニ缶開けたことがありますか？カニ缶を上げると何か入ってますよね？そう紙です。なぜこの紙が入っているかと言うと、あの紙を入れないとカニは独特の酸があって腐食するんです。それでこのカニ缶を何とか腐食させないために、何度も何度も試行錯誤して紙を入れると腐食しないというのを国後島の缶詰業者が突き止めたんです。そして缶詰を作って横浜から海外にたくさん出荷してました。

択捉島にまいますと鮭がたくさん獲れるんです。そして択捉島は山がたくさんあります。大小の山、山、山です。山があると川があります。川が植物プランクトンを運びます。そして一番北の方にラッキベツという所があるのですが、ここには海との落差が141mの滝があります。私も洋上から見た事ありますが、これは見事です。こういう川や滝がいっぱいあるので、植物プランクトンが運ばれます。一方流水が来ます。流水もたくさんプランクトンを運んできます。ですからオキアミが発生します。オキアミが発生すると、色々な魚が来るんですね。そうするとシャチです。この辺りはたくさんシャチが生息しています。本当に素晴らしい海域です、この北方の海域は。皆さん鮭というと、何処も同じだと思うでしょうが、択捉島の鮭は世界の中で一番味が良いと言われてます。みなさんも美味しいお魚を食べていると思いますが、やはり何処の何が美味しいとこれほどこのが美味しいとあると思いますが、鮭も海流とか栄養などで違うと思いますが、鮭がとても美味しいです。昭和4年には鮭が遡上してきて川が鮭だらけになって、獲りきれなくて上のほうにあるのは死んで臭くてたまらなかった、と言うくらい凄かったそうです。

昔は、鮭を塩蔵してましたね、塩漬けにしてですね。この北海道から生活物資を送ってたのですが、択捉は塩だけはソマリランドから、アフリカのソマリランドから入れていたそうです。皆さん、こんな遠くに居ても択捉の人は結構おしゃれで、テニスをしてました。通販でデパートから買い物をしてましたし、百貨店などは横浜まで行って仕入れをしていました。だから結構おしゃれな生活をしていました。離島に居る割にはおしゃれでした。

択捉と色丹には特別なグイ松があって、横に枝を張る松があってこれは非常に珍しい松です。一方択捉島には一部の松の所では松茸が採れたそうです。国後島には私の背より高い蕨が育ちます。こんな高いと堅いだらうと思うでしょうが、切るとバシャと水が出て、とても柔らかくて美味しいです。海には海鳥がたくさんいます。

戦前島の中をどうしていたか人々がどうしてたかと言うと、私達の生活で一番必要で大事だったのは馬です。人間も大事ですが、次に大事だったのは馬です。村から村に行くのには馬を使ってきました。それから魚を捕って荷を揚げるのも馬です。全部馬が必要でした。昆布を陸揚げするのも馬でした。ですから沢山の馬が必要でした。

馬を大事にしましたので、択捉などの大きな島では隣村から隣村に行く途中に駅通という独特の物がありまして、この駅通から次の駅通は馬に乗っていく。で、その駅通に馬がいますので、そこで次の馬を借りて次の駅通に行く。乗ってきた馬を放すと馬はちゃんと自分の所に帰って行く。ところが馬も利口で、内地から来る方、本州から来る方が馬を借りると動かない。どうしても動かなかったそうです。わざと意地悪をする。馬に慣れていない人を見抜くそうです。高いお金を払っても、馬が動いてくれなくて歩いて大変だったという話がたくさんあります。

では私の家族について話させていただきます。私は歯舞群島の志発島という所で生まれました。先程から歯舞群島は帰りそうだからって話がありましたが、私は同じように島で生まれて島で同じように苦労してきた人達と、一緒に帰りたいと思います。

私の家は昆布漁をしていました。朝の4時頃から起きて、真っ黒になって働いたそうです。昆布漁をするのによく「血と汗で開拓した北方領土」と言うのですが、簡単に昆布と言いますが、私の先祖は岩手から江戸時代に入ったのですが、あの頃と言えば満足な道具もなく小さな船である島に入った。私は今年も行きましたが、何年前前に島に立ったとき、私の先祖は何故江戸時代にここに来ようと思ったんだろうとつくづく思いました。多分今の志発島と同じような草原に立って開墾したんだろうと思います。

干場を作るには、まず草を抜きます。そして黒い土を少し入れます。少し入れた所の真ん中を、ほんの少し真ん中を高くするんです。そこに溝を作るんです碁盤の。それからその上に砂利を入れるんです。そして砂を入れます。そしてまた土を盛ります。また碁盤を作ります。それから砂利を入れて砂を入れます。恐らく荷から運ぶときも木の桶やなんかで運んだと思います。今のようにはスコップもなかったですから。

本当に苦労したと思います。これは何故こんな事するかと言うと、昆布は水に弱い。昆布は水が掛かったら質が落ちます。だから干場を大事にしなければならない。まずは干場作りからなんですね。その干場はしっかり作らなければ昆布を生産できません。そして水はけを良くする。朝4時に起きて男衆達は海に出ていきます。女や子供たちは真っ黒になって干場に昆布を干します。あの昆布は凄く長いんです。それを夕方しまう。乾いてしまうと昆布が折れてしまうので、少しお湿りが来るまで待ってしまいます。そういう生活をずっと長閑にしていました。それは本当に手間の掛かるものです。私の家は4代住んだのですが、恐らくみんな春になると朝から働き夕方まで働いて、秋になると生産して冬になると道具の整理をして、と繰り返して暮らしていたのではないかと思います。

小さな島で草原でしたが、春になると花が咲きます。秋になると今では高級になったハスカップが沢山実るので、それを摘んできて塩漬けにしたりジャムにしたりしました。肉はトドとかアザラシの肉を塩漬けしたり味噌漬けにしたりしました。そんなふうにして親から預かった島を平和になんの不可も無く暮らしてて、楽しみという敬老会でうちの祖父がドジョウすくいを踊って。

今でも言われます「あなたのおじいさんはドジョウすくいの名人だったのよ」と。島全体が一つの家族のように生活していました。

そんな中で何があったかという、8月15日になる前に、7月に私の島と根室とは25キロ離れていました。7月に根室の空が真っ赤に染まった。それが1週間続いたそうです。根室がアメリカ軍に空襲を受けて、7割が焼け野原になったそうです。それで島の人たちは、いずれ島にも来るかも知れないと思いながら生活していたそうです。そして米軍は誰も来ませんでした。

そして8月15日にラジオから流れる天皇陛下の話を聞いて、自分たちはどうなるのだろう。でも連絡が来ないから、このまま静かに暮らして居れば大丈夫と普通の暮らしをしていました。そして8月28日に択捉島の留別にソ連兵があがってきた。そして次々に占領されました。

私の島に上がってきたのが9月3日だそうです。とても天気の良い日だったそうです。沖合に大きな船が、軍艦が現れました。そしてソ連兵が上がってきた。アメリカ人が来ると思っていたそうです。

まず、文化と風習の違いは非常に誤解を招く事がありまして、どの島も大きな建物から占拠された。ですから学校とか役場とか、お寺とか神社が占拠された。私の所も上がってきた時、上がってきたすぐの所に立派なお寺がありました。で、当時はお墓を作らないで、お寺の骨堂にお骨を預けていた。そこで、上がってきたソ連兵が何をしたかという、骨箱って綺麗ですよ。それでとても良い物が入っていると思ったのでしょね。骨箱をひっくり返してお骨を出しました。これが文化の違いですね。

それから民家にも上がってきて、言葉が判らないから土足で銃を持って入ってきたら本当に震え上がりますよね。時計をいくつも付けて、ネジを巻くのが判らないから止まったら捨てて、欲しいものがあると指を指す。そしてまずしたことが家族が何人か、日本兵を匿っていないか、アメリカ兵はいないか。で、家族構成を聞きました。

ちょうど私は生まれて1年でした。家族は、女子供は絶対乱暴されるんじゃないかと噂があったので、姉と兄がいて1歳の私と。家族は相談して屋根裏部屋に私と母を隠したそうです。私の家では母と私はいない事になってる。そうして暮らすことになった。そうやって私達は暮らしていました。

一方、国後島に住んでいた家族の話を少しだけします。国後島に上がってきて、ちょうど18歳の娘さんのいる家族なんですが、当時娘さん達は胸にさらしを巻いて髪を裁ちばさみでバチバチ切って、あぐらをかいて男物を着る。当時18歳だったその方に直接話を聞いたら、ある日父親から「このままだと何時乱暴されるか判らないから、島を脱出するぞ」と言ったそうです。ずっと故郷と思って住んでいた島を離れること、友達と別れなくてはならなくて悲しかったと。そしてもの凄い天気の良い日に脱出するわけです。それはソ連軍の目を眩ませるために、今日は脱出しないだろうと思う日に脱出するんです。だから今日から服を着て寝ろよと言われたそうです。寝ても涙が出て恐ろしくて恐ろしくて、ここを離れるかと思ったら悲しかったと。枕元の小さな手提げバックに荷物を入れて寝ていた。で、ある日お父さんが「今から出るぞ」と。小さな船で沖に出て、それから自分の家の焼き玉エンジンの船に乗り換える。その時にお母さんが、着物の襟に小さな袋を縫い付けて「万が一ソ連兵に見つかって乱暴されそうになったらお互いにこれを食べましょう」と。その小さなまんじゅうなんですけど、その中には「猫いらず」当時の毒が入っていたんです。ソ連軍に乱暴されるくらいなら死んだ方がましだと言って縫い付けたそうです。本当に怖くて怖くて大きな声で叫びたくなったそうです。

そしていざ根室に向かいましたが、大嵐だし船は全然進まない。それでお父さんがこれじゃ船

が転覆するから、ちょっと湾の中に入ろうと入り江に入ったそうです。で、翌朝目が覚めて目に入ったのが、先に脱出した人達の遺体だったそうです。その方達もやはり頑張ってきて、そして亡くなった。自分の姿はこれかと思ったら叫びたくなかった、と。怖くてもう船には乗りたくないと思った。その遺体をカラスたちがついばんでたけれども、自分たちは何も出来なかったと。それで、せめてものと思えばにあった貝殻で砂を掛けて、船に乗って根室に向かったそうです。根室に向かって出てしばらくした頃、お父さんが「もう出て良いぞ」と言われて見たら、根室の町並みが見えた。お母さんと泣きながら毒入りのまんじゅうを襟から出した。そして2人で「助かったね」と。その方は私よりもずいぶん上ですけれども、私の故郷は目で見える国後島で、故郷が恋しい。でもあの恐ろしさを思ったら、自分は絶対島に渡ることは出来ない。その方も先日亡くなりました。その家族も他の脱出した人も、色んな事がありました。別の家族は親子で脱出して遭難して、その時に、子供の手を取ろうとしたら子供が波に飲まれてお母さんはずっと子供を岸辺を探しましたが、とうとう見つかりませんでした。皆さん大変な思いをして脱出しました。

それでは私の家族はどうだったかと言うと、もうしょうがないここで暮らすしかないと観念したそうです。家の父は軍馬の種馬を飼育していたので、馬がいました。ですから軍人が馬を乗り換えに来てました。そのうち軍人のパターンが判ると、今日は来ない日だからと下の居間で暮らしました。今日は何曜日だから来ると言うときは、隠れていました。で、今日は来ないという日に母は下に居ました。そこに来る予定日ではない日で、母は居間に居たところソ連軍の将校が来たそうです。家族は凍り付いたそうです。騙っていたので。その時みんなはどうしようと思って凍り付いていたらこの将校もビックリしたそうです。居るはずのない赤ちゃんとお母さんがいたので、お互いにビックリしたそうです。その時、ロシア語は判らないけれど将校が手を出したそうです。で、家の母は将校の仕草が子供を抱きたいのかなと思ったそうです。普通は大事な娘ですから渡さないですよ。でも家の母は将校に渡したそうです。そしたら将校は、とっても上手にあやした。で判らないのだけれど、将校は自分にもこれ位の子供がいるというような事を身振りで伝えた。その時私の家族は、ソビエト兵も自分達と同じじゃないか。子供を可愛がる同じような人なんだと感じた。

将校もそれから私を自分の子供代わりに可愛がって、島を離れるまで可愛がって自分の馬に私を乗せて歩いたそうです。だから私には、私を一番可愛がってくれた戸籍上の父親とロシア人の父親が島に居た2年の間いたような感じだったそうです。他の兄妹は可愛がられなかったそうで、大きくなってからおまえは変な奴だロシア人に可愛がられてと言われましたが、それが良かったのかもしれない。私が今ビザなし渡航でロシア人を怖がらず普通に話せるのは親の教育というか将校のおかげだったのかなと思います。ただ、母にはあなたはなんて薄情な母親だったんだとよく言いましたけれど。

で、最初はソ連軍が入ってきましたけれど、しばらくしてからウクライナからドイツ軍に焼け野原にされたウクライナ人達が紙袋にフライパンとちょっとした物だけ持って入ってきました。どの島にもそうです。その頃入ってきた人の家が無かったので、家も半分学校も半分。全部半分です。正直に言うと私達はソ連軍の監視下に置かれて、隣村に行くにもパスポートを渡されて、当然根室にも行くことは出来なくなって、ソ連の監視下での生活が始まりました。

家は昆布漁だったのですが、父は道路造りに駆り出されて漁には出れませんでした。何処の家もそうでしたが、漁に出ると脱出するからでしょうね。このまま暮らしていくのかなと思っていたそうです。不便はありましたが、どうにか魚を捕って、ちょっとした野菜は作れました。魚釣りをする魚がありますし、黒パンが支給されてたし、軍が置いていった物を食べたりして暮らし

ていました。そして本土送還という話が持ち上がったんです。

よく沖縄と北方領土の違いは、なぜ日本人は誰も残らなかったんだと言われます。その本土送還の時にどういう命令が出たかという、この命令に従わないで残るとソビエトの国籍になる。そうしたら親たちは、子供達は日本人だし自分たちも日本人だ。そうしたら一度は本土送還に従って引き揚げ船に乗って行こう。必ず帰ってこれる、と思ってました。私達家族、当時は妹も産まれて11人でした。天気の良い日に島の反対側に連れて行かれて、一人ずつ調べられました。沖合にはソ連の大きな貨物船が来ていたそうです。そこまで行くのに小さな磯舟に乗せられて、荷物はわずかでした。

どうやって貨物船に乗るか。梯子はないんですね。私達は貨物船に荷物を入れるモッコと云うのですが、これに入れられて洋上でウィンチで上げられて、ドサッと船倉に入れられたんです。その網は揺れます。下を見れば海です。家族からその時の話を聞くと、念仏を唱える者、失禁する者本当に大変だったそうです。そして、必ず帰ってこいと、私を可愛がってくれた将校さんが見送ってくれたそうです。そして送られた所は樺太だったんです。根室まで近いのですが、島を回って樺太に送られました。

11月だったので、海は荒れてます。船倉の中の人達は壁にある梯子を登らなければ上に行けない。で、船倉は異様なニオイがしたんですね。嘔吐はする、そして死んでいく方もいました。一方トイレ。トイレは甲板でします。そうすると何が起こるかという、嵐なので糞尿が混ざった水が頭から落ちてくる。私達は本当に荷物だったんです。沖縄も満州から帰ってきた方もみんな苦労しましたが、どういう訳か北方領土のこういう話が伝わっていません。

そうして樺太に着きました。船で亡くなった方は、病気が蔓延するからと海に捨てなければなりません。私達は樺太の真岡で女学校に収容されました。これは冬でした。食事も黒パンと塩のスープだけでした。マンマ食べたい、マンマ食べたいと言いながら沢山の方が亡くなりました。そして、ようやく函館に戻ってきました。そして根室に向かいました。それは、私達は必ず島に帰れると思っていたのです。それが71年経ってしまいました。

私が何故北方領土返還運動をしているかという、私の祖母の親が、父親が初代で志発島に渡っているのです。ある年、島の春の海明けが遅くなったので、島の代表が根室まで米や食料なんかを根室に買いに行ったんです。丘の上で、みんなと一緒に祖母が船の帰りを待っていて、みんな帰ってきた、帰ってきたと喜んでいる目の前で船が転覆しました。そして私の曾祖父は亡くなりました。だから祖母にとって、自分の親をお参りするのには大事な役割だったので、引き揚げしてから「お墓参りお墓参り、必ず帰るんだ、帰ったら一緒に暮らすんだ」と言い続けました。

なぜ私と一緒に暮らすぞと言ったかという、引き揚げた時に私達には家がなかったのです。島に居た時だけが家族全員で住んでいたんです。それから物心ついて、大人になるまで一度も家族11人で暮らすことなく今日に至りました。父がやっと船を買いに行った帰りに事故で亡くなりました。戦後、引揚者は大変な思いをしました。祖母は、毎日丘の上から島に帰るんだと、水平線の向こうに見えるんです。見えるのに行けないんです。本当に辛かったと思います。そして70歳になった夏に、海に入って島に向かって歩き出したんです。おそらくもう心は病んで頭は壊れていたんだと思います。「帰りたい、帰りたい、帰るんだ、帰るんだ」と一番言ったのは祖母でした。その祖母が海に入って、その時は家族が気づいて引き戻しました。でもやっぱり心が病んでたんだと思います。その翌年の冬に川に入って亡くなりました。本当に帰りたかったんだと思います。そういう意味で私は、家族全員で暮らしたところ、祖母が帰りたかった家族が唯一暮らした所に帰るために何かしなければならぬと思って、北方領土返還運動を続けております。

私が島に初めて行ったのは平成元年です。これがみんなが帰りたい、祖母が帰りたいと言っていた島かと思ったら涙が出ました。波の音が聞こえて、波が引くときに小石がコロコロ鳴る音がこれが故郷の音なんだな思いました。そして祖母があんなにお参りしたかったので、お参りしてきました。でも家の跡には行けませんでした。その後自由訪問で自分の生まれた家の跡まで行きました。

私の島は1960年代にソビエトが命令して建物を全部壊せと命令したので、一軒も家がありません。でも凄いんです。みんな家の跡まで行くんです。島は凄く浸食されているのですが、私の先輩が、歩いてあの沼まであって、ここまで行ってと。何も無いんです。草原なんです。でも行くと立てるんです。私が初めて家の跡に立ったときに涙が出ました。ここに私達は住んでたんだ。ここに家があったんだと。そして、引き揚げる時に必ず帰るからと穴を掘って色々埋めてきたんです。

で、スコップを持って行きましたら、おじさんがこの辺が台所だ、この辺に埋めたぞというので掘ると、鉄瓶とか水瓶とかが出てきました。「ああ、これを使いたかったんだろうな」と思いました。そう思って歩いていくと草の丈が短くなってましたが、歩くと足の感触が変わるんです。叔父にもしかして、ここ干場？と聞くとやっぱり干場でした。先程話したように私の先祖が丹精込めて作った干場は、しっかり作ってあるので草が伸びないんです。ああこれが私の先祖が大切に作った干場なんだと。私もロマンティックなので、「帰ってきたか。さあご飯だぞ。入れ入れ」という声が聞こえた気がしました。

今年7月に島に行ってきました。かなり浸食されてました。3.11の津波。それから今年の爆弾台風でもの凄く浸食されてましたが、昆布が沢山ありました。昆布の島だなと思いました。で、草が一面に生えてました。そこを80過ぎの人が1時間30分歩くんです。そうして自分の家までやってきました。もうこれが最後だと言うてましたが、去年行こうとしていた人の1/4くらいの方が行けませんでした。帰りに80過ぎの人が歩くの疲れたからと息子さんがおんぶして歩きました。私もおばあさんと来たかったな。父、母、家族と一緒に来たかったなとしみじみ思いました。

そういう色々な体験をしてきましたが、少しでも私の話を聞いて、皆さんが北方領土というのは政治の問題でもあるのだが、元島民にとって大事な故郷なんだと。そして北方領土というのは元島民だけの島では無く、日本国民みんなの島だと。国後、択捉には温泉も湧きます。豊かな島です。非常に綺麗な島です。ぜひ自分が生きている間に私達とあの島に行くんだと思って、署名活動なり返還運動なりで私の話を参考にして欲しいです。

みなさん始めまして。私は金田慎吾と申します。

私は、北海道の石狩市というところに住んでいます。石狩市は札幌市のお隣の町で、石狩川の河口のある街です。主な特産物はサケですが、それ以外には特にこれといった産業の無い、札幌市のベッドタウン的な街です。

今日は北方領土を語る会ということで、ご承知の方も多いと存じますが、北方領土問題とはどういふものなのかを、まずは簡単にお話しさせていただきます。

北方領土は択捉、国後、色丹、歯舞群島で構成され、北方4島とも言われています。その面積は5,003.1km²になります。みなさんの住んでいる高知県の面積は7,105km²ですから、高知県よりも少し小さい面積ですが、同じ四国の香川県は1,877km²に徳島県は4,145km²、愛媛県は5,676km²ですので、ひとつの県に匹敵する面積を有しています。当時はこの北方4島に17,291人の人が暮らしていました。

そこに昭和20年、第二次世界大戦終戦の年の8月28日から9月5日にかけてソ連軍が侵攻してきたのです。

ところで、みなさんは第二次世界大戦の終戦の日って何月何日か知っていますか？知っていますよね、当然8月15日ですよ。ソ連が侵攻してきたのは終戦の日よりも後の8月28日からなのです。でも、ロシアは、「終戦の日は、戦艦ミズーリ号で日本が降伏文書に調印した9月2日である」と回答したのです。私は終戦の日は8月15日以外の日を聞いたことがなかったので、こんな認識もあるのかと、国によって考え方や終戦の日のとらえかたも違って来るんだと。確かに正式な調印の日が終戦の日だと言われると、決して間違いではないとも言えます。日本の中だけにいては分からないこともたくさんあることを学びました。

ただ、ポツダム宣言を受諾して無条件降伏した国の領土をかすめとるようなソ連の行動にはいきどおりを感じずにはられません。

ソ連に侵攻された後、元島民の方は2～3年間島に住んでいましたが、その後強制的に島を追われることとなります。よく島から引き揚げという言葉が使われることがありますが、その実態はそんな生易しいものではなく、現実には脱出と強制送還という過酷なものであったと聞いています。具体的な内容は元島民の河田さんに譲りますが、こうして、元島民の方は自分の故郷を追われてしまうことになりました。

ちょっと想像してみてください。ある日突然、ここにみなさんが住めなくなることを。四国はほかの国が統治するので、ほかの地に移住しなさい、なんて言われたらどうしますか。家も、仕事も、学校も、お墓も、なにもかも捨てて、今すぐここから出て行きなさい！・・・ここは、これから違う国が支配します。なんて言われても、困りますよね。どこへ行ったらいいいのか、仕事は？学校は？住むところは？明日からどうすればいいのか？想像してみてください。途方にくれますよね。

でもこんなことが実際にあったのです。これが北方領土問題なのです。今の自分にあてはめて、想像してみてください。今、住んでいるこの地を、着の身、着のままで、出て行くことを・・・。北方領土に住んでいた人たちの苦労が、そして、どれだけ大変な思いをしたか。おそらく、今、さまざまな災害などで、避難生活している人も同じような状況でしょう。でも、それが70年続い

ているのです。特にあの時は終戦直後ですから、親戚や知人をたよっても、みんな大変な時で、迷惑をかけることもできない。そのつらさたるや、私たちの想像を、はるかに超えるものがあつたんだろうと思います。沖縄も終戦後、アメリカの占領下にありましたが、住民はそこに住むことができました。今でも米軍基地の問題などがあり、沖縄の人たちも本当に大変だとは思いますが、北方領土の人たちは、そこに住むことさえ、許されませんでした。こんな理不尽なことはないです。いきなり住んでいる所を追われて、そこに行くことすらできなくなって、生活の基盤を根こそぎ奪われたのですから。誰でも言います。「ふるさとを返してくれ」と。「家を、土地を、お墓を、思い出を、私たちのふるさとを返して欲しい。」と。ただそれだけです。しかし、いまだ元島民の願いはかなえられません。島に帰りたくて、帰りたくて、願いかなわず亡くなった人も、たくさんいます。それもそのはず、終戦からもう70年も経ってしまいました。当時20歳だった人も、もう90歳です。私たちは急がなければなりません。元島民の人たちがまだ生きている間に、北方領土を返してもらわなければ、意味が無いのです。

そして、この北方領土問題こそ、国の都合で元島民の方々につらく悲しい思いをさせたものであるといえると思います。人生を狂わせられた人の数で言えば、北朝鮮の拉致問題でさえも、北方領土問題の比ではありません。私は、この北方領土問題が、国を挙げて、真剣に取り組んでいかなければならない、重大な問題だと考えております。

ただ、人生を狂わせられた私の母は、北方領土から引き揚げて来たおかげで、私の父と出会い、私が生まれました。人生が狂ってしまったおかげで生まれた私は、ちょっと複雑な心境で、逆に旧ソ連に感謝しなくてはならないのかもしれませんが、それはまた別の話で、やはり、正すべきものは正さないといけないと思います。

私の母は昭和4年生まれで、今年87歳になりますが、一昨年私の娘、つまり孫と一緒に国後島に墓参に行ってきました。孫と一緒に自分の故郷に行けたのは、母にとってとても喜ばしいことであつたようで、その時の話をとてもうれしそうに話してくれました。また、私の娘もとても貴重な体験をしたと話してくれました。特に娘が驚いたのが、じぶんのおばあちゃんが現地のロシア人ととても流暢なロシア語で会話していたということでした。確かに、おばあちゃんがいきなり外国語をペラペラしゃべりだしたらびっくりしますよね。娘はおもわず、「ばあちゃんかけ〜！」と言ってしまったそうです。

母がロシア語を話せるのは、終戦後もしばらく北方領土にとどまり、数年間ロシア人たちと生活していたからだそうです。今年は母と私と私の姉の3人で国後島の母の故郷である古釜布というところに墓参に行ってきました。墓参なのであくまで墓参りということで、行くところも制限されていましたが、やはり自分の故郷に来たということで、母は本当にうれしそうでした。

政治的な話では、1956年に、日本と旧ソビエト連邦との間で、平和条約締結後、歯舞、色丹の2島を日本に返還するという内容の日ソ共同宣言が交わされました。ロシアはソ連の継承国としてその意義を認め、平和条約締結後に2島の引き渡しは行うということを言っております。しかし、これは返還ではなく、あくまでロシア側の善意による引き渡しである、と主張しています。戦争の結果としての領土の帰属は、あくまでロシア側にあるという考え方です。したがって、残る国後、択捉両島は引き渡さないと考えています。しかし、領土の引き渡しを屈辱的外交と捉える国が、日ソ共同宣言で2島の引渡しを盛り込んでいるということは、そもそも北方四島の占領の過程に多少の引け目を感じているからに違いないと、私は思っています。

日本としては、日ソ共同宣言については、2島の引き渡し後に残る2島の引き渡しについて継続協議するものと捉えており、ロシア側とは基本的な考え方で対立しています。

10年前の10月19日にモスクワ市庁舎で開催された「日ロフォーラム」では、当時は衆議院議員だった鳩山由紀夫さんが、「もう一度1956年の日ソ共同宣言の原点に立ち戻って考えることを提案する」と述べ、河野太郎衆議院議員が「日ソ共同宣言から日ロ両国がともに歩み寄り、例えば、国後島と択捉島を合わせた面積を1/2にし、択捉島に国境線を引くという方法もある」と、具体的な提案をされました。ただ、ロシア側の対応については、この問題をできるだけ棚上げしたいという意図を全体的に感じました。とはいっても、日ソ共同宣言から節目の50年を迎えた年に行われたこの「日ロフォーラム」は、北方領土問題の解決の糸口となるような期待を持たせる有意義な大会でした。

私の個人的な見解としては、歴史的にもソ連の4島占領は侵略行為であり、国際的に見ても不当なものであると思います。しかし、両国が「4島だ」「2島だ」と主張し合っていたのでは、いつまでたっても解決の道は見当たらず、元島民の方が生きているうちに問題が解決するとは思えません。北方領土に住んでいた方たちに故郷を返すという最大の目標を実現させるためには、早急に領土返還に向けた現実的な対応を行うべきだと思います。そして、現実的に解決することを図るなら、両国が互いに譲歩し、ともに納得できる具体的な解決方法を提案し続けることが大事なのではないかと、モスクワ訪問で強く感じました。

広島、長崎に落とされた原爆に今なお苦しめられている人たち、ふるさとを奪われて今なお戻れない人たち。戦争という国家間による暴力行為は未だに国民に痛みを残し続けています。このようなことが二度と起こらないように、私たちは後世にこれを伝えていかなければなりません。これから、みなさんが、戦争や原爆について、お子さんやお孫さんに語り継ぐ時、この北方領土問題についてもひと言申し添えて下さい。それだけで、今日、私が皆さんの前でお話させていただいた意味があったかなと思います。

最後までご静聴いただきまして、ありがとうございました。

多楽島元島民 河田 弘登志 さん

私は河田弘登志と申します。北方領土歯舞群島の多楽島出身ですが、現在は未だ返還されない我が故郷の島々が間近に見える、北海道の根室市に住んでおります。

実は私、北方領土関係で高知県に来るのは初めてですが、毎年全国各地から北方領土現地視察や関係行事などで大勢の方々が根室市にお出でになりますので、その時にお会いした方が本日お集まりの皆様の中にもいらっしゃるのではないかと考えております。

高知県と北方領土の関係について少し触れたいと思います。1869年明治2年8月、蝦夷地が北海道と改称されたとき、新政府によって北海道の一部を高知藩が統治するようになりました。そして同年12月には、北方四島択捉島の薬取郡の統治も任され、多くの高知県人が北海道や千島の開拓に活躍したと言われています。

また、全国的にも有数の水産県である高知県のかつお漁船団が、黒潮と親潮がぶつかる北限の漁場に毎年出漁していました。

さて、北方領土または北方四島とも言いますが、北海道の根室半島に連なる歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の島々で、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない我が国固有の領土です。面積は歯舞群島が95km²、色丹島249km²、国後島1,489km²、択捉島3,167km²で併せて5,003km²で千葉県や愛知県、福岡県と同じくらいあります。周辺海域は、世界の三大漁場と言われた恵まれた環境の中で漁業、水産業を中心に17,291人が生活をしていました。

歯舞群島は水晶島、秋勇留島、勇留島、志発島、そして私が生まれ育った多楽島の5つの島がある事を余り知られていないように思います。特に歯舞群島の周辺は昆布の宝庫で、北方四島の30%以上の5,300人が昆布などの海藻類を採取して生活していました。現在歯舞群島の面積は、根室市の面積に含まれています。根室市の5分の1がロシアに不法占拠されているのです。

私の生まれ育った多楽島は、歯舞群島の最東端で根室市の納沙布岬から約45キロ離れた所にある面積11km²の小さな島です。島の中心地古別には学校やお寺、郵便局、無線局、巡査駐在所または水産物検査所、駅通や診療所の公共施設が集中しておりました。人口は231世帯1,457人で、私が5年生まで通っていた多楽国民学校の児童、生徒も239人と北方四島にあった39校の中で一番多く、人口密度も一番高い島でした。

島の地形は平らで、海岸線に隙間の無いくらい家が建ち並び特に昆布漁に適していました。私の祖父は明治時代に、両親は大正の初期から多楽島に定住するようになり、私も島で生まれて11歳まで住んでいました。

島の主産業は漁業でしたが、島の周辺は昆布の宝庫で質量ともに大変良く昆布採取が盛んでした。昆布漁が始まる春5月頃から半年間は、非常に忙しくなり朝早くから夕方遅くまで大人も子供も一家総出で寝る間もないくらい一生懸命働きました。

このような厳しい生活の中にあっても、島を挙げての運動会やお祭り、学芸会、青年団の趣向を凝らした演芸会など、娯楽の少ない島にあっては最高の楽しみでした。辛いこと悲しいこと、また楽しいことや嬉しいことなども皆で分け合い、島中が一つの家族のように助け合いながら、戦時中ではありましたがいたって仲良く、和やかに生活しておりました。

ところが昭和20年8月15日、敗戦という日本人にとって忘れられない日になりました。そして

敗戦のショックから何とか気を取り直して生産に励もうとしていた矢先の8月28日から9月5日の間に北方領土はソ連軍に不法に占拠されてしまったのです。まさかソ連軍が上陸してくるとは思っていなかった島民は皆びっくりしました。

新築したばかりの我が家にも2人のソ連兵が土足で上がり込んできて、銃を突きつけアメリカはいないか、兵隊を匿っていないか、銃を隠していないかなどと言いながら天井を突いて家捜ししました。また「トッキー トッキー」「サッキー サッキー」と言って腕時計や酒などを欲しがりました。

私達兄弟5人は、親の背に隠れるようにして恐る恐る見ておりましたが、引き出しからカミソリやバリカンを持って行きました。島の人たちは、若い女性などは何をされるか判らないということで、変装して納屋や物置とか押入れの中などに隠しました。

ソ連軍は、島の中心地の古別に進駐して学校や無線局など公共施設は全部占領してしまい、頼りにしていた日本兵はまもなく何処かに連行されて行きました。後で聞いたのですが、北海道に帰すと言われて船に乗せられたがシベリアに何年も抑留されていたそうです。

無線も切られ、本土との通信も全く途絶え、ただ飛び交うのは不穏なデマばかり、他の島では村の責任者が銃殺されたところもあります。私の島でも銃殺寸前ということがありました。9月と言えば漁期の真っ最中で、私も父と夜「いか釣り」漁に出て発砲されたことがあります。

毎日毎日銃口を突きつけられての生活。通信は途絶え、夜間の外出も出来なくなり島民は次第に不安と恐怖が募り、やむなく夜陰に乗じて身の回りのものを少々持って小舟で脱出するようになりました。

通常だと4～5時間で楽に根室港に着くのですが、ソ連軍に発見されないようにエンジンの音が聞こえなくなる沖合まで手で漕いで、更に途中のソ連軍に見つからないように大きく迂回するため、通常の2倍も3倍も時間が掛かります。出航する時は風の良い時を見計らって出航のですが、それだけ時間が掛かると秋の海なので途中で時化に遭い、水船になって目的地以外の海岸に漂着し、命からがら地元の人に助けられた人も沢山います。島を出て71年、未だに辿り着いていない人もいます。

私は学校にも行けず、友達もいなくなった島で遊び相手になってくれていたアレキセと呼んでいたソ連軍のNo.2の兵隊に、ある日学校に行きたいという事を話しました。彼は11年間学校に行っていたと言い、子供は勉強しなければ頭がバカになると言って、根室に行くことを許可してくれました。

昭和20年10月末、たまたま島に来ていた親戚の船で2歳下の弟と2人で島を出る事になりました。その時アレキセは「学校が終わったらまた島に帰って来いよ」と言って学校から新しい机を2個持ってきて、「根室に行っても机が無いと思うから、これを使いなさい」と言って見送ってくれました。

もちろん新築したばかりの家もあり、両親や弟妹たちもいるわけですから、「学校が終わったらすぐ帰ってくるよ」と約束したのですがついには帰ることが出来ず、両親や弟妹達と再会できたのはそれから2年以上後の雪がちらつく頃でした。

先程もお話ししたように、北方四島には当時17,291人の人が住んでいましたが、そのうちの約半分は一時避難的に島を脱出したのです。よく「おまえ達は島を捨ててきたのではないか」と言われた事もありましたが、決して島を捨ててきたのではないです。来年になったらソ連軍はなくなるだろう。そしたらまた島に帰るつもりだったのです。

島に残った半数の人がどうなったかと言うと、昭和22年から23年にかけて強制送還させられた

のです。島に残るのであればソ連人に帰化して残るか、そうしないのであれば強制送還と二者択一を迫られました。

私の家族も昭和22年9月6日の夕方、突然帰国命令（強制送還）が出て1時間以内に大急ぎで身支度をして船に乗り込んだそうです。そして隣の志発島に約1ヶ月半収容され、またソ連の1万トン位の大きな貨物船に編み目の大きなモッコで荷物同然に積み込まれたそうです。

数時間後には根室の港に着くものと思っていたが、なかなか着かないので父が甲板に出て星を見たところ船は北へ北へと走っており、着いた所は樺太の真岡港だったそうです。ところが先に送還されて来た人が大勢いて収容する場所が無く、暫く上陸することが出来ず、港を出たり入ったりしながらトイレも満足に付いていない貨物船の中で1週間もギユウギユウ詰め込まれ、汚い話ですが甲板の上で用を足したそうですが、海が荒れて波を被ると汚物諸共頭から被ったそうです。

樺太では、かつての女学校を改装して座って漸く入れるくらいの高さで畳2枚位に仕切り、薄い板を敷いただけの所に6～7人も入れられ、1ヶ月も日本からの引揚船を待ったそうです。食事は黒パン1切れくらいと塩ニシン、大豆の入った薄いスープ位で、誰もが栄養失調になり随分と多くの老人や子供が日本の土を踏むこと無く亡くなったそうです。ただ穴を掘って凍った死体を転がしてあるだけで、一握りの土も掛けてあげる事が出来なかったと平成13年に88歳で亡くなった母が何時も悔やんでいました。

我が家を出てから根室に着くまでの約3ヶ月間の長旅で、食べる物も着る物も無く着の身着のまま裸一貫とはまさにあの時の事を言うのだなと思います。本当に見るも哀れな姿でした。二度とあのような姿を見る事はないでしょう。

当時の根室は終戦の1ヶ月前に空襲を受け、街の中心部の80%が焼け野原となり、罹災を受けた町民も住む家が無くまだ煙の立ち込める中に、島を追われた多くの人が避難してきたのです。物置や馬小屋、防空壕の中などとにかく雨、露がしのげる所であればどんな所にでも身を寄せ合い、冬になると周りから凍ってくるような、朝起きると薬罐のお湯が凍っているような所で何年も過ごしました。

皆さんは、平成23年3月11日の東日本大震災の様子をテレビや新聞などでご覧になったと思います。罹災された方々には、本当に言葉では言い表す事が出来ないくらいお気の毒で、とても他人事とは思えませんでした。

それは、私達も71年前に全ての財産を失い、同じようなことを体験したからです。住む家も無く、衣食住全てが自給自足で国からの援助もほとんどありませんでした。

北方領土には、52カ所の墓地に約4,000人の方が埋葬されています。昭和39年から北方墓参が始まり、途中14年間の中止がありましたが平成27年までの38年間の実施で元島民等述べ3,400人が参加しました。平成11年からは北方四島への自由訪問が出来るようになり、平成27年までの17年間で元島民など述べ2,866人が参加しました。

平成4年からは北方四島交流事業が始まりましたが、これにも元島民など述べ1,987人の参加がありました。これらはいずれも制約があり、何時でも誰でも自由に行けるという訳ではありません。元島民の高齢化に伴い、近年は二世や配偶者などのサポーターも必要になってきました。これまで3事業併せて元島民等述べ8,253人が参加しましたが、この内元島民は実質何人が参加できたのでしょうか。

今更申し上げるまでもなく、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方領土は歴史的にも、国際法上から見ても紛れもなく日本固有の領土です。面積の大小、資源の有る無しだけでなく、国

家の主権と尊厳に関わる大切な問題です。さらに北方領土問題は元島民や一部の地域、一部の人の問題ではありません。1億3千万全国民一人一人の問題です。

北方領土が旧ソ連・ロシアに不法占拠されてから71年が過ぎました。昭和20年8月15日終戦。その1ヶ月前に根室は空襲で街の中心部80%を焼失しました。罹災者の援護や脱出してきた島民の受入れに不眠不休で当たっていた大混乱の中で、当時の安藤石典根室町長が昭和20年12月1日付けで、連合軍最高司令官マッカーサー元帥に対して「北方領土をアメリカ軍の保障占領下に置いて欲しい」と陳情をし、返還要求運動の狼煙を上げてから71年になります。しかし未だに返還の兆しすら見えなく、誠に残念です。

北方領土問題は全国民の問題と言いながら、国民運動と言いながら、未だに関心が無い、知らないという人がまだまだ多いのでは無いかと思います。

昭和56年、政府は閣議で2月7日を「北方領土の日」と定め、この日を中心に全国各地で関連行事を実施していますが、「北方領土の日」これすら知らない、関心が無いという人がまだまだ沢山居ます。誠に残念です。これはやはり次代を担う青少年が学校教育の中でもっとしっかり領土問題を勉強できるようにしなければならないと思います。

小・中・高校・大学と一貫した領土教育、そして公民など社会教育の中でも取り上げていくことが必要だと思います。また、高校・大学の入試や就職試験などには必ず北方領土問題を取り入れてもらうのが必要だと思います。特に官公庁は、もっと領土問題を勉強しなければならないという環境を作る事も必要ではないか。百聞は一見にしかずと申します。根室の納沙布岬からわずか3.7キロ沖合までロシアに不法占拠されている現実を、一人でも多くの方に見て頂きたいと思います。

元島民も既に半数以上が亡くなりました。また6,300人の平均年齢も81歳を超えました。私達元島民はこれまで一日として休むことなく返還運動を続けて来ましたが、残念ながら未だに解決の糸口さえ見えないというのが現状です。

私達はこれまで一貫して北方四島の早期一括返還を基本方針として運動して参りました。今後とも国の外交交渉を強力に後押しするため、この基本方針を堅持して粘り強く運動を続けて参りたいと思っておりますが、私達にも大きな課題があります。それは後継者対策です。

今までは二世対策をしてきましたが、これからは二世とともに三世、四世の対策をして行かなければならないと考えています。そして、その内の1人でも多くの人に当時の島の様子などを語り継いで行きたいと思っております。

私が生まれ育った小さな島、多楽島のことを中心にお話をさせて頂きましたが、何か一つでも参考になれば大変ありがたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。